

復興に向けて



被災バドミントン選手支援の会 高嶋誠司代表に聞く。 「震災をきっかけに バドミントンに出会った子の支援も」

これまで日本バドミントン専門店会の渡邊勇樹さんや、北都銀行バドミントン部の原田利雄監督といった、バドミントンに関わる仕事を
持つ方の支援の形を紹介してきた。
しかし、一般のなかにも震災後、
バドミントンに関する支援を行なってきた人がいる。
ネットを通じ、バドミンのニュースを
届けてきた高嶋誠司さんだ。
高嶋さんは震災後、
「被災バドミントン選手支援の会」を
立ち上げ、
被災者にバドミントン物資を
贈る活動を続けてきた。



■ 2学期の浪江小・中学校再開にともないバドミントン用具一式を支援。あわせて講習会も催した
■ 震災発生からおよそ3か月間は震災によりバドミントン用具を失った被災者を中心に支援。写真は福島県南相馬市の選手たち
■ 全国から集まった支援物資は、5カ所ある集積地に集められ希望者に渡された

支援活動のきっかけは私の子どもが被災し、震災後、福岡に戻ってきたことでした。帰ってきたときはまさに着の身酒のまま。手元には何も無い状態だったんです。帰宅後はいつも何か考え事をしてるような様子でした。

しかしある日、彼が何も無いまま帰ってきたことを知り、ラケットも靴も持たなくていいから体育館においでと行ってくださった方々がいたんです。そこで羽根を打たせてもらい、初めて普通の子どもらしい笑顔がこぼれた。そして、その後借りていた物をお返ししようとしたとき、ありがたいう言葉をいただいたんです。「まだまだ困っている方がいるでしょうから、その用具はそういう方々に差し上げてください」と。

このとき、私の子どもがバドミントン用具でこれだけ救われたのだから、東北にはもっとバドミントン用具が必要としている人がいるだろうと気づいたんです。これが私の支援活動の原点になりました。ちなみにこの言葉をくださったのは、岡垣ジュニアを主宰する池田信太郎選手のご両親です。

写真手裏剣。活動で知り合った人々が仲間

4月中旬、活動はスタート。趣味への支援は時期尚早という声が多数のなか、力になってくれたのは、私がかねてから展開していたボランティア活動「写真手裏剣」で出会った方々です。写真というのは、一人ひとりの大切な思い出になりますよね。私は大会に出場

している子どもたちを撮影し写真差し上げる活動をしていこうと。いつしか、その子のご両親に、「ぜひ、よその頑張っているお子さんも撮って、その子にも写真を差し上げて下さい」と印紙紙などの支援をいただくようになりました。そして広がっていった全国の保護者の輪が、今回の活動の大きな推進力となってくれました。

活動を始めるにあたってのスロガンは、「被災地にラケットを1000本送ろう」です。ただ、これは誰にでもわかりやすい呼びかけをするためだったので、実際はウェアや靴など、バドミントン用具なら何でもいただいていた。集積所は有志による協力で青森・福島・愛知・広島・福島の5カ所。こちらに集まった物を

ご連絡いただいた方々に直接お届けするというやり方です。石巻市の中学校からの要請をきっかけに始まった活動は、個人単位の活動なので、日本協会や各都道府県協会、また専門店会さんのような組織的な活動はできません。ですから、とにかく用具が必要だと声をあげてくださった方に直接、お届けする。点と点、を結ぶ活動を展開していったのです。

7月末くらいまでは、ラケット1本、シューズ1足が震災でバドミントンから離れそうになっていた子どもたちをつなぎとめてくれるんじゃないか、そんな思いでした。実際に月1回ペースで、宮城県石巻市や仙台市、福島県の南相馬市、いわき市、二本松市といった町に足を運びました。

震災後、バドミントンに出会った子への支援をスタート

そんな活動も徐々にコンセプトが変わっていききました。同じように活動してきた方々たちのおかげで子どもたちに十分な用具が行き渡ってきたからです。そんなとき、福島県の浪江町教育委員会からこんなご連絡をいただきました。「放射線の線量が高く、屋外の授業やレクリエーションが制限されている中で、運動負荷が高く、生徒同士がコミュニケーションを深めることができず、何よりも屋内でできるスポーツとしてバドミントン競技に着目しています。しかし、用具がなく、可能な範囲で支援をしていただけませんか」これに関しては、迷いました。



本来、行政がやる仕事ですし、個人ペースの当会の活動では賛同できない方もいるだろうと。しかし、震災でバドミントンから離れてしまった子どもたちへの支援だけでなく、震災をきっかけにバドミントンに出会う子どもたちがいる。その子たちを支援する形もあるんじゃないかという意見があり、最終的に支援を決定しました。

先は任せていただいていたんですが、こういう支援を求めている人がいるから協力いただけないかと呼びかける形に変えていったんです。被災3県でオープン大会を

からの学校再開を決め、そんななかでの支援希望でした。実際に2校へ物資をお届けしたのは、8月8日です。1カ月後には津村製作所のご支援を得て総重量320kgを超える「移動式支柱」もお届けできました。現在は、小中約30名ずつ、中学校では全員がバドミントン部に所属しており、子どもたちは避難住宅からバスで峠を越え学校に通っています。その際、彼らの肩にはラケットバッグがかかっているんです。なかには初めてプレーする子もいるので、9月下旬、福島県協会のご協力のもと、元中国代表の高上美風さんを講師に迎え、講習会を実施することもできました。

ちが学校を卒業する前に同窓会のようなオープン大会もしくは練習会を被災3県で開催できないかと考えています。ここにすれば靴も道具もあるから遊びにおいで、と。経済的事情でバドミントンが続けられない子が多く、しかし、今後生きていくうえで「地震がきっかけでバドミントンをやめたんだ」といってほしくないんです。



■ 浪江小・中学校には移動式のポールも贈られた
■ 浪江小・中学校に支援物資を贈る際には、元中国代表でジュニアショナルの高上美風選手の母・美風さんも同行し、講習会が開かれた
■ 約30人の浪江小・中学校にバドミントン用具一式運ばれたほか、生徒個人に対しても米倉加奈子プロジェクトからラケットが贈られた



ここを境に物資の募集の形も変わりました。それまで物資の行き先は、行政がやる仕事ですし、個人ペースの当会の活動では賛同できない方もいるだろうと。しかし、震災でバドミントンから離れてしまった子どもたちへの支援だけでなく、震災をきっかけにバドミントンに出会う子どもたちがいる。その子たちを支援する形もあるんじゃないかという意見があり、最終的に支援を決定しました。

また最後に、写真手裏剣を撮影してあげたいです。地帯で思い出を失くしてしまつた子のために思い出をつくってあげたいし、コートに入っている子どもたちの笑顔は大人にエネルギーを与えてくれます。大会を実現させたあかつきには、私の原点である写真手裏剣を展開するのが目標です。

あなたの声が、 広告を 動かします。



あなたの広告へのご意見を
ジャロへお寄せください。
広告を審査し、より良い広告に
なるよう改善を求めています。

tel:03-3541-2811
受付時間:9:30-12:00/13:00-17:00(土・日・祝日は休み)
<http://www.jaro.or.jp>



公益社団法人
日本広告審査機構
〒104-0045 東京都中央区築地2-11-26
築地MKビル fax:03-3541-2816

ジャロはみなさまからの声をもとに広告・表示を審査し、適正化に努めている民間の広告自主規制機関です。ご連絡の際は、広告の問題点、広告主や商品名・サービスの名称、媒体名と広告が出た日時をお知らせください。(広告をお送りいただく場合もあります)ただし、取引上のトラブル、裁判中のもの等、ジャロが扱えないものもあります。